

現代日本語「自己実現」の意味内容の変質 —テキストマイニングの手法を用いた通時的考察—

佐々木 英 和

宇都宮大学教育学部紀要
第63号 第1部 別刷
平成25年（2013）3月

The Transformation of Semantic Contents of “Ziko-Zitsugen”
which is the Modern Japanese Word
Meaning Self-Actualization and/or Self-Realization
:An Diachronic Analysis on Qualitative Data
Based on the Text Mining Method

SASAKI Hidekazu

現代日本語「自己実現」の意味内容の変質 —テキストマイニングの手法を用いた通時的考察—

The Transformation of Semantic Contents of “Ziko-Zitsugen”
which is the Modern Japanese Word
Meaning Self-Actualization and/or Self-Realization
:An Diachronic Analysis on Qualitative Data Based on the Text Mining Method

佐々木 英和
SASAKI Hidekazu

はじめに

本稿は、筆者が昨年度に執筆した、テキストマイニングを用いた論文の続編である¹⁾。このときは、研究対象全体を捉えて、新たな発見をすることを心がけた。これに対して、今回のものでは時系列的な視点を加えて、テキストマイニングの手法を用い、もっぱら名詞に着目して研究作業を進める。

本稿では、年代区分のし方として、四捨五入を用いて「年代前半」と「年代後半」とを機械的に分けることにする。つまり、西暦で言えば、末尾の数字が「0, 1, 2, 3, 4」が年代前半、「5, 6, 7, 8, 9」が年代後半を意味するシグナルとなる。また、1年を「1月1日～12月31日」までの365日間ないし366日間を意味することだとする。したがって、本稿では、「1980年代前半」は「1980年1月1日～1984年12月31日」、「1980年代後半」は「1985年1月1日～1989年12月31日」、「1990年代前半」は「1990年1月1日～1994年12月31日」、「1990年代後半」は「1995年1月1日～1999年12月31日」、「2000年代前半」は「2000年1月1日～2004年12月31日」、「2000年代後半」は「2005年1月1日～2009年12月31日」を意味している。この点については機械的に切り分け可能なので、例外を設けなくて済んでいる。

なお、本稿において用いている新聞記事の引用部分について、「自己実現」および他のキーワードをアンダーラインで目立たせるとともに、アンダーラインの種類を使い分けていることを事前に断っておく。具体的には、「自己実現」という単語そのものには細いアンダーラインを引き、これにまつわるキーワードに対しては太いアンダーラインを引くことを基本として、対比すべき場合など、必要に応じて波線のアンダーラインを用いている。

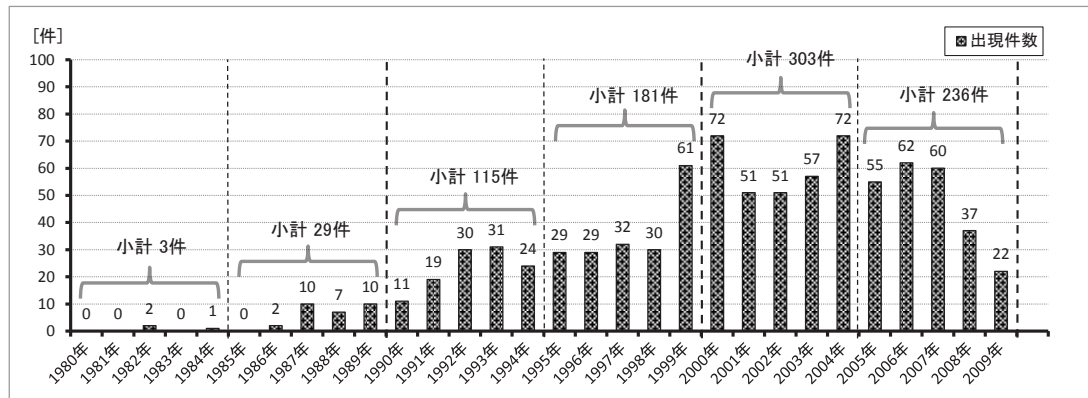
I 現代日本語「自己実現」の普及度合いをめぐる概況

現代日本語「自己実現」の普及度合いを捉える上で、量的側面の把握を顕在的な基盤に置き、質的側面を考察していくという手順を取りたい。まずは、テキストマイニングソフトを用いた結果をもとにして、この言葉の普及度合いをめぐる概況を押さえておきたい。

A 「自己実現」の普及度合いに関する量的変化

全体状況については、「自己実現」という単語それ自体の出現数ではなく、「自己実現」という単語

【図表1-1】 日本語「自己実現」の出現件数の変化(1980～2009年)



が用いられている文章の件数を基本としてカウントしている。

新聞データベース「ヨミダス」における「自己実現」の初出は1918年であったが、その年から1979年までに出現した29件を除外して、「自己実現」という単語を含む文章の出現件数について、1980年代以降の変遷をグラフ化して示すと、【図表1-1】のようになる²⁾。「自己実現」の件数は、1980年代後半を境として、一気に増えていく。1980年代前半(1980～1984年)は計3件であったが、1980年代後半(1985～1989年)は計29件まで増えている。1990年代前半(1990～1994年)には計115件に激増した後、1990年代後半(1995～1999年)には計181件となっている。ただし、2000年代前半(2000～2004年)には計303件にまで一気に増えたが、2000年代後半(2005～2009年)には計236件と減少傾向を示した。

このように、「自己実現」は、1980年代後半に一般的にも用いられるようになった日本語へと昇格した後、1990年代に一気に普及し、最近では若干の減少傾向が見られるものの、2000年代には当たり前のように用いられる言葉になったのである。そして、今回は、量的変化を形式的に追うにとどまらず、質的变化を内容的に明らかにしようとするというわけである。

ただし、年代ごとの自己実現の特徴を言う場合に、「自己実現」を尺度として明確に社会意識を語れることが可能になるのは、せいぜい1990年代以降であり、1980年代もおぼつかないと言わざるをえない。よって、1979年以前については、自己実現の普及という意味では、前史的な位置づけとみなして、テキストマイニングの作業を行う上では、ひとまとめにして分析することにする。

B 自己実現概念の質的变化をめぐる概観

日本語「自己実現」の随伴的用語としては、名詞が量的な意味でも種類の意味でも豊富なので、分析対象を名詞に絞ることにする。諸々の名詞について、1979年以前を一つのグループにまとめてしまうこととして、1980年代以降は5年単位を目途として整理していき、これらをテキストマイニング手法によって整理して表にしたものが【図表1-2】である。

全期間(1918～2009年)を対象として、名詞のみを取り出して行った単語ランキングに注目してみると、「自己実現」(計895件、件数頻度94.91%、905回出現)以外では、2位が「社会」(計112件、件数頻度11.88%、138回出現)、3位が「人(人々)」(計102件、件数頻度10.82%、111回出現)、4位が「自分」(計101件、件数頻度10.71%、121回出現)、5位が「仕事」(計88件、件数頻度9.33%、102回出現)、6位が「女性(おんな、女、彼女)」(計85件、件数頻度9.01%、106回出現)、7位が「場(場所)」(計76

【図表1-2】 時期ごとの名詞の単語ランキング(上位抜粋)

名詞					名詞					名詞					名詞				
全時代(1918～2009年)					1979年以前					1980年代前半(1980～1984年)					1980年代後半(1985～1989年)				
順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数
1	自己実現	905	94.91	895	1	自己実現	29	96.55	28	1	自己実現	3	100.00	3	1	自己実現	29	93.55	29
2	社会	138	11.88	112	2	人	6	17.24	5	2	経験	2	66.67	2	2	仕事	9	25.81	8
3	人	111	10.82	102	3	能力	5	17.24	5	2	臨床	2	66.67	2	2	社会	9	25.81	8
4	自分	121	10.71	101	4	中	5	13.79	4	4	メカニズム	1	33.33	1	4	人	6	19.35	6
5	仕事	102	9.33	88	5	個人	4	10.34	3	4	ユング	1	33.33	1	5	女性	3	9.68	3
6	女性	106	9.01	85	5	自分	5	10.34	3	4	過程	1	33.33	1	5	場	3	9.68	3
7	場	83	8.06	76	5	人間	4	10.34	3	4	6	1	33.33	1	5	生き方	3	9.68	3
8	子供	69	6.15	58	5	中年	3	10.34	3	4	幸雄	1	33.33	1	5	道	3	9.68	3
9	教育	69	5.51	52	9	あり方	2	6.90	2	4	考察	1	33.33	1	5	日本人	3	9.68	3
10	能力	51	5.20	49	9	コンピュータ	2	6.90	2	4	死	1	33.33	1	5	余暇	3	9.68	3
11	人生	46	4.67	44	9	ばら色(否定)	2	6.90	2	4	治療	1	33.33	1	11	意識	2	6.45	2
12	中	41	4.24	40	9	危機	2	6.90	2	4	自己	1	33.33	1	11	価値観	2	6.45	2
13	活動	40	4.14	39	9	競争	2	6.90	2	4	心理学	1	33.33	1	11	解放	2	6.45	2
13	個人	41	4.14	39	9	教育	2	6.90	2	4	真	1	33.33	1	11	活動	2	6.45	2
15	自己	41	3.92	37	9	教養	2	6.90	2	4	図形	1	33.33	1	11	感性	2	6.45	2
16	若者	37	3.50	33	9	社会	2	6.90	2	4	石塚	1	33.33	1	11	言葉	2	6.45	2
17	育児	37	3.39	32	9	症候群	2	6.90	2	4	探求	1	33.33	1	11	個性化	2	6.45	2
17	個性	33	3.29	31	9	性	2	6.90	2	4	著	1	33.33	1	11	国	2	6.45	2
19	意識	32	3.18	30	9	全体	2	6.90	2	4	病気	1	33.33	1	11	最近	2	6.45	2
20	心	33	3.08	29	9	特性	2	6.90	2	4	方法	1	33.33	1	11	志向	2	6.45	2
20	人間	32	3.08	29	21	社会的	1	3.45	1	4	夢	1	33.33	1	11	時代	2	6.45	2
22	男性	31	2.97	28	21	若者	1	3.45	1	4	立場	1	33.33	1	11	自ら	2	6.45	2
23	今	28	2.86	27	21	主婦	1	3.45	1		-----				11	自己実現型	2	6.45	2
23	母親	28	2.86	27	21	場	1	3.45	1		-----				11	自分	2	6.45	2
25	ボランティア	30	2.65	25	21	人生	1	3.45	1		-----				11	就職	2	6.45	2
25	生活	26	2.65	25	21	生きがい	1	3.45	1		-----				11	充実	2	6.45	2
25	夢	25	2.65	25	21	生き方	1	3.45	1		-----				11	充実感	2	6.45	2

名詞					名詞					名詞					名詞				
1990年代前半(1990～1994年)					1990年代後半(1995～1999年)					2000年代前半(2000～2004年)					2000年代後半(2005～2009年)				
順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数	順位	単語	出現数	頻度(%)	件数
1	自己実現	117	93.50	115	1	自己実現	183	96.28	181	1	自己実現	305	94.69	303	1	自己実現	239	94.78	236
2	自分	20	13.82	17	2	場	29	12.77	24	2	社会	47	11.56	37	2	人	38	13.65	34
3	社会	22	13.01	16	3	自分	30	10.64	20	3	自分	35	10.00	32	3	社会	34	12.05	30
4	女性	19	10.57	13	4	社会	24	10.11	19	4	人	34	10.00	32	4	仕事	36	11.65	29
5	活動	11	8.94	11	5	人	17	8.51	16	5	女性	34	9.38	30	5	自分	29	10.84	27
6	仕事	11	8.13	10	6	女性	17	7.45	14	6	仕事	31	8.75	28	6	女性	33	10.04	25
6	人間	11	8.13	10	7	仕事	15	6.91	13	7	能力	29	8.44	27	7	子供	26	8.03	20
8	人	10	7.32	9	8	自立	12	6.38	12	8	子供	26	7.50	24	8	人生	21	7.63	19
9	子供	11	6.50	8	9	ケア	11	5.85	11	8	場	25	7.50	24	9	育児	20	6.43	16
9	場	8	6.50	8	9	ボランティア	15	5.85	11	10	教育	32	7.19	23	9	場	17	6.43	16
9	男性	9	6.50	8	9	高齢者	12	5.85	11	10	個性	25	7.19	23	11	教育	18	6.02	15
12	教育	8	5.69	7	9	参加	11	5.85	11	12	個人	22	6.56	21	12	母親	12	4.42	11
12	生徒	7	5.69	7	9	尊敬	11	5.85	11	13	自己	17	4.69	15	13	今	11	4.02	10
12	中	7	5.69	7	14	活動	9	4.79	9	13	心	16	4.69	15	13	若者	11	4.02	10
15	今	6	4.88	6	15	個人	8	4.26	8	15	人生	14	4.38	14	13	中	10	4.02	10
15	母親	6	4.88	6	15	時代	10	4.26	8	16	若者	15	4.06	13	13	能力	10	4.02	10
17	喜び	5	4.07	5	15	若者	9	4.26	8	17	意欲	13	3.75	12	13	夢	10	4.02	10
17	個人	5	4.07	5	18	言葉	7	3.72	7	17	家庭	12	3.75	12	18	意識	8	3.21	8
17	私	6	4.07	5	18	国連	7	3.72	7	17	日本	13	3.75	12	18	世代	8	3.21	8
17	自己	5	4.07	5	18	自己	9	3.72	7	20	意識	12	3.44	11	18	力	8	3.21	8
17	心	5	4.07	5	18	生活	7	3.72	7	20	環境	13	3.44	11	21	意欲	7	2.81	7
17	生き方	5	4.07	5	18	中	7	3.72	7	20	国	12	3.44	11	21	家庭	8	2.81	7
17	地域	5	4.07	5	23	意識	6	3.19	6	20	生活	12	3.44	11	21	会社	8	2.81	7
24	ボランティア	4	3.25	4	23	原則	6	3.19	6	20	創造性	11	3.44	11	21	学校	7	2.81	7
24	道	4	3.25	4	23	今	6	3.19	6	20	男性	11	3.44	11	21	活動	7	2.81	7
24	能力	4	3.25	4	23	子供	6	3.19	6	20	地域	12	3.44	11	21	経験	7	2.81	7
...	...(省略)...				23	人生	6	3.19	6	27	育児	11	3.13	10	21	貢献	8	2.81	7
38	育児	3	2.44	3(省略)...				27	滴美	20	3.13	10	21	私	7	2.81	7
38	人生	3	2.44	3	29	生きがい	5	2.66	5(省略)...				21	自己	7	2.81	7
38	日本人	3	2.44	3	38	教育	8	2.13	4	41	ボランティア	9	2.50	8	21	団塊	7	2.81	7

※ 表中で、太字で示された単語は全時代(1918～2009年)で11位以内に入っているという理由で本文中で主題化したものを示し、斜体で示した単語は他に本文中で主題化されたものを示す。

件、件数頻度8.06%、83回出現)、8位が「子供(子ども、子、児童)」(計58件、件数頻度6.15%、69回出現)、9位が「教育」(計52件、件数頻度5.51%、69回出現)、10位が「能力」(計49件、件数頻度5.20%、51回出現)となっている。

ただし、「自己実現」を対象として行ったテキストマイニングである以上、必然的に1位が「自己実現」となり続けるので、これを除外して考えるならば、実質的な1位は「社会」ということになる。よって、11位までを考慮して初めて、実質的なベスト10を捉えたことになる。本研究の場合、11位の「人生」(計44件、件数頻度4.67%、46回出現)を実質的な10位として扱えるというわけである。

以下、全期間をとおして頻出するこれらの単語が、時代状況的にどのような様相を呈しているかを確認してみることになる。

まず、1980年代から後の5年単位に区切って、全期間にわたってコンスタントに上位に位置する単語を挙げてみる。あらかじめ概況を示すと、上位から順に「社会」、「人(人々)」、「自分」、「仕事」、「女性(おんな、女、彼女)」は時代的変動がそれほど見られず、常に上位に位置する単語である。

全時代2位で実質的に全時代1位に相当する「社会」という単語は、1979年以前が9位(計2件、件数頻度6.90%、2回出現)にすぎない上に、1980年代前半にはカウントされていない。だが、1980年代後半が2位(計8件、件数頻度25.81%、9回出現)、1990年代前半が3位(計16件、件数頻度13.01%、22回出現)、1990年代後半が4位(計19件、件数頻度10.11%、24回出現)、2000年代前半に2位(計37件、件数頻度11.56%、47回出現)、2000年代後半に3位(計30件、件数頻度12.05%、34回出現)である。「社会」とは、いつの時代にも上位4位以内にカウントされるような、抜群の安定感を持った随伴的単語であることが確認できる。

また、全時代3位の「人(人々)」も、日常的によく用いられる単語であるためか、常にベスト10に入り、しかも基本的には上位にランキングされている。「人(人々)」は、全体で3件しかなかった1980年代前半こそランキング入りしなかったとはいえ、1979年以前の時代には2位(計5件、件数頻度17.24%、6回出現)になっているし、1980年代後半が4位(計6件、件数頻度19.35%、6回出現)、1990年代前半が8位(計9件、件数頻度7.32%、10回出現)、1990年代後半が5位(計16件、件数頻度8.51%、17回出現)、2000年代前半が4位(計32件、件数頻度10.00%、34回出現)、2000年代後半が2位(計34件、件数頻度13.65%、38回出現)である。

全時代4位の「自分」も、全体で3件しかない1980年代前半こそカウントされなかった。しかし、それは、1980年代後半が11位(計2件、件数頻度6.45%、2回出現)であるほかは、1979年以前の時代には5位(計3件、件数頻度10.34%、5回出現)になっているし、1990年代前半が2位(計17件、件数頻度13.82%、20回出現)、1990年代後半が3位(計20件、件数頻度10.64%、30回出現)、2000年代前半に3位(計32件、件数頻度10.00%、35回出現)、2000年代後半に5位(計27件、件数頻度10.84%、29回出現)である。このように、「自分」という名詞も基本的に常に上位5位までに入る単語である。

全時代5位の「仕事」も、「自己実現」に随伴する単語として超時代的に頻出している。1980年代後半が2位(計8件、件数頻度25.81%、9回出現)であったことにはじまり、1990年代前半が6位(計10件、件数頻度8.13%、11回出現)、1990年代後半が7位(計13件、件数頻度6.91%、15回出現)、2000年代前半が6位(計28件、件数頻度8.75%、31回出現)、2000年代後半が4位(計29件、件数頻度11.65%、36回出現)であり、ベスト10から外れたことがない。

さらに、全時代6位の「女性(おんな、女、彼女)」に至っては、1980年代後半が5位(計3件、件数頻度9.68%、3回出現)、1990年代前半が4位(計13件、件数頻度10.57%、19回出現)、1990年代後半

が6位（計14件、件数頻度7.45%、17回出現）、2000年代前半が5位（計30件、件数頻度9.38%、34回出現）、2000年代後半が6位（計25件、件数頻度10.04%、33回出現）というように、順位にほとんど変動がないのである。「女性（おんな、女、彼女）」という単語は、超時代的に「自己実現」に随伴してきた単語であると言える。

全時代7位の「場（場所）」も、ほぼベスト10の枠内で順位が動く単語である。それは、1980年代後半が5位（計3件、件数頻度9.68%、3回出現）、1990年代前半が9位（計8件、件数頻度6.50%、8回出現）、1990年代後半が2位（計24件、件数頻度12.77%、29回出現）、2000年代前半が8位（計24件、件数頻度7.50%、25回出現）、2000年代後半が9位（計16件、件数頻度6.43%、17回出現）であるという具合である。

また、これらの超時代的な常連組とも言えるキーワードとはほど遠いが、全時代総合8位の「子供（子ども、子、児童）」と同9位の「教育」はともに比較的に順位が安定している。加えて、両者は互いに順位の動き方が似ているとみなせるものである。たしかに、「子供（子ども、子、児童）」は、1980年代後半には計1件（件数頻度3.23%、1回出現、時代順位は12位）しか出てこず、1990年代前半には9位（計8件、件数頻度6.50%、11回出現）にまで上昇した後、1990年代後半には23位（計6件、件数頻度3.19%、6回出現）にまで順位を落としている。また、「教育」についても、1980年代後半には36位（計1件、件数頻度3.23%、1回出現）だったものが、1990年代前半には12位（計7件、件数頻度5.69%、8回出現）へと躍り出た後、1990年代後半には再び38位（計4件、件数頻度2.13%、8回出現）まで順位を落としている。だが、これは、後ほど確認するように、1990年代後半に「国際高齢者年」の関連で「高齢者」関連の用語が一時的に増大したことにより、「子供（子ども、子、児童）」と「教育」の順位がともに相対的に落ちたからである。実際、これらは、その後の2000年代をとおしては「自己実現」についての随伴的単語として安定感を見せる。「子供（子ども、子、児童）」については、2000年代前半に8位（計24件、件数頻度7.50%、26回出現）、2000年代後半に7位（計20件、件数頻度8.03%、26回出現）という具合である。また、「教育」については、2000年代前半に10位（計23件、件数頻度7.19%、32回出現）、2000年代後半に11位（計15件、件数頻度6.02%、18回出現）という具合である。

一方で、「自己実現」という言葉が普及するとともに、その時間的経過に寄り添う形で存在感を増している単語がある。それが、名詞の総合11位にランクされている「人生」である。1979年代後半が21位（計1件、件数頻度3.45%、1回出現）と相対的に高順位であるのは、その年代の分母が28件と少ないため1件でも上位に来てしまうからである。だが、1980年代後半が36位（計1件、件数頻度3.23%、1回出現）、1990年代前半が38位（計3件、件数頻度2.44%、3回出現）、1990年代後半が23位（計6件、件数頻度3.19%、6回出現）、2000年代前半に15位（計14件、件数頻度4.38%、14回出現）、2000年代後半に8位（計19件、件数頻度7.63%、21回出現）であるという具合に、時代が下るのに呼応するがごとく順位を確実に上げている。ちなみに、「人生」は、1990年代以降の5年ごとの件数頻度は2.44%・3.19%・4.38%・7.63%と着実に上昇していて、随伴的単語としての存在感が明らかに増している。なお、この質的な意味合いについては、後ほど詳しく考察することにする。

加えて、時代ごとに「自己実現」にとっての随伴的単語として独特の特徴を示していると言えるものがある。順位の乱高下という意味では、全時代を通して名詞の総合10位の頻度に位置する「能力」の動き方が極めて激しい。1979年以前に出された「自己実現」を含む29文のうち「能力」を含んでいるものは5文を占めており、1979年以前の時代の名詞の単語ランキングで同点2位（計5件、件数頻度17.24%、5回出現）である。それにもかかわらず、1980年代をつうじて、“十三年前から企業研修事業

を続けている東京・「創工」社の能力開発研究所では、この七月、「女性のための自己実現セミナー」を開催したばかり”（1988年8月22日付、東京朝刊）という一文に出てくる会社名の一部として「能力」が1件カウントされるにすぎない。この「能力」という名詞は、1990年代前半には24位（計4件、件数頻度3.25%、4回出現）で登場し、1990年代後半には96位（計2件、件数頻度1.06%、2回出現）にまで落ちてしまったのにもかかわらず、その後の2000年代をとおしては「自己実現」についての随伴的単語として比較的量的次元における安定感を見せる。実際、「能力」は、2000年代前半に7位（計27件、件数頻度8.44%、29回出現）、2000年代後半に13位（計10件、件数頻度4.02%、10回出現）にランクしている。

Ⅱ 1979年以前および1980年代の「自己実現」の意味内容

新聞データベース「ヨミダス」検索により得られた結果では、1918年に新刊紹介として出された本のタイトルで“社会的自己実現教育進化の六千年”（1918年1月1日付、朝刊）がもっとも古い。この時点以前は、「自己実現」が新聞上の話題になる以前の段階だと言える。当然、「自己実現」が広く社会的に一般的な話題になる段階にまでは至っていないと言い切ってよい。

本稿では、日本語「自己実現」の普及の段階に関して、1918年から1979年までの言語状況を「前史的展開」とみなし、件数がまだ少ない1980年代を「萌芽期」とみなして、順に論じることとする。

A 1979年以前の自己実現概念の特徴

1979年以前については、「自己実現」の普及の歴史という意味では、前史的な位置づけを与える。よって、テキストマイニングの作業を行う上では、ひとまとめにして分析することにする。ヨミダスにおいて日本語「自己実現」がポツポツと見られる段階であり、この日本語が一般化しているとは言いがたい時代においては、「自己実現」という言葉を聞くことがあれば、当時としては目新しく感じられた人が多かったはずである。

記事の数が合計で14件であり、文章としては28件、出現頻度としては29件である。合計28件のうち、1918年以外の27件は戦後に現れた「自己実現」であるので、実質的に終戦後40年近くの歴史を示しているとみなせる。他の期間よりも長いこの前史的期間において、単語ランキング上位に位置する名詞については、その中味を確認しておくとともに、ある程度の考察を加えておくことにする。

まず、全時期の名詞ランクの11位までに入っていて、かつ1979年以前の時期にも11位以内に入っている単語としては3種類を指摘できる。「人(人々)」(計5件、件数頻度17.24%、6回出現)と「能力」(計5件、件数頻度17.24%、5回出現)とがともに2位であり、「自分」(計3件、件数頻度10.34%、5回出現)が5位に位置している。また、全期間を通して比較的高いものが当該期間にランキングされているという意味では、全時代で12位の「中」(計40件、件数頻度4.24%、41回出現)が4位(計4件、件数頻度13.79%、5回出現)、全時代で13位の「個人」(計39件、件数頻度4.14%、41回出現)が5位(計3件、件数頻度10.34%、4回出現)、全時代で20位の「人間」(計29件、件数頻度3.08%、32回出現)も5位(計3件、件数頻度10.34%、4回出現)という具合である。

これらに対して、「中年」という名詞は、1979年以前の順位として5位(計3件、件数頻度10.34%、3回出現)に位置している。だが、「中年」は、この時期にしか出てこないキーワードであり、しかも一つの新聞エッセー(1977年6月18日付、朝刊)の中で集中的に登場している単語である。具体的中

身としては、“中年の危機／自己実現症候群／のぼりつめたあとの人生の生き方／河合隼雄”というタイトルの文章の中で、“中年の自己実現症候群”という表現が出されて、“中年の危機におちいった高度成長の旗手たちの自己実現は、必然的に成長の影に存在する深淵（しんえん）の体験につながってゆく”と、筆者の河合隼雄は「自己実現」に対する両義的態度を示している。

1979年以前の前史的時期については、全期間をつうじて10位の「能力」が、ここでは2位に位置していて（計5件、件数頻度17.24%、5回出現）、件数頻度も全体の二割近くを示していることを確認しておきたい。このことを考慮すると、この具体的な意味内容をチェックしておく必要がある。そこには、「自己実現」という日本語が一般化する前には、それが能力主義的文脈で用いられていたという痕跡を確実にうかがうことができる。

一方では、“「自己実現」のために個人の能力、特性を知る方法として、ウルフ氏はコンピューターによる「個人を因数分解する」サンプルを提示した”（1970年4月13日付、東京朝刊）というように、「自己実現」に至るための不可欠の手段として「能力」を重視した文章がある。他方では、“同じにスタートを切ったあと、競争を通じて能力を発揮することが自己実現であると信じられてきた”（1975年2月24日付、東京朝刊）ことを踏まえ、“そこでは、早くゴールした人が高く評価され、大なる能力を示した人ほど自己実現したことを意味していた”（1975年2月24日付、東京朝刊）ということを批判的に捉え、“自分の能力を自分個人のために発揮するのではなく、それを抑え、遅い人を援助することに注入することこそ人間性に富んだ自己実現であると考えなのだ”（1975年2月24日付、東京朝刊）といった、能力主義を批判するとともに自己よりもむしろ他者に目を向けさせるという珍しい自己実現観もある。「自己実現」は能力主義的な文脈で出てくると同時に、それに限定されて解釈しまうために哲学的な深みがないことに対する批判的言説も出ているというわけである。

ところで、全期間をつうじて20位（計29件、件数頻度3.08%、32回出現）であるのにもかかわらず、この期間には5位（計3件、件数頻度10.34%、4回出現）に位置している「人間」が、“労働は生産の道具ではなくて、人間の自己実現であるべきでこと”（1965年5月11日付、東京朝刊）、“今後は“人間形成”の立場に立って、国民の自己実現に貢献するものとして、教育・文化を見直すことが必要である”（1972年6月9日付、東京朝刊）という深遠な哲学のような意味あいを持つことに注目しよう。また、2位（計5件、件数頻度17.24%、6回出現）に位置している「人（人々）」の使われ方として、“一般化に伴う誤解も避けられないようで、自己実現というと立身出世の現代語のように受け取っている人さえる状態である”（1977年6月18日付、東京朝刊）と批判的文脈で用いられることがあるのに対して、“人間をひとつのトータルな存在としてみようとする、人間の全体性に対するあくなき追求が自己実現の過程である”（1977年6月18日付、東京朝刊）というように、「人間」という名詞は肯定的に使われている。また、「個人」という単語に関して、“これからの主婦の自己実現も、個人の教養、趣味の分野だけでなく、社会にどう貢献するか、という尺度を重視した生活こそ一層すばらしい質の自己実現となり、充実した生きがいを生む、という結論になろうか”（1975年2月24日付、東京朝刊）と言われるように、やはり人間としての哲学的意味合いが含まれている。

いずれにせよ、今や当たり前すぎてわざわざ問うことも忘却されがちだが、「自己実現」とは「人」について語る文脈で扱われることが半ば前提となった言葉である。それは、モノはもちろん動物に対して用いられることが稀の言葉だと言えるし、特に「個人」に焦点が当てられがちだということが再確認される。

なお、「中」という日常語に注目してみると、“組織の中で自己実現する”（1966年7月7日付、東京

朝刊)、“チームワークの中の自己実現”(1966年7月7日付、東京朝刊)、“実践活動の中に自己実現の場の拡大をはかる”(1978年6月20日付、東京朝刊)というように、「自己実現」という日本語がどのような条件下で現実化するのかについての具体的な条件を形容するときに用いられる傾向にあることがわかる。

B 1980年代(1980～1989年)の自己実現概念の特徴

まず、1980年代前半(1980～1984年)の状況については2記事3件がカウントされているだけなので、これらについては、キーワードを特に意識せず、記事の中味を具体的に確認しておく。一つめの記事として、1982年9月20日付の朝刊に“自己実現の方法”と題されて掲載されているのは、ニューヨークで精神科医を開業している石塚幸雄の著作のタイトルそのもののことであり、それについて書評で“臨床の経験からさまざまな図形を用い、自己実現をメカニズムとして説くのがいかにも目新しい”と論じられたものである。もう一つの記事は、1984年3月6日付の朝刊に“病気と自己実現－真の治療関係を求めて”と題された河野博臣の著作の新聞広告が出されているものがカウントされ、“死の臨床からの経験や、夢による自己探求の過程を、ユング心理学の立場から考察”と説明されている。以上から明らかなように、主として心理学的な分野で「自己実現」が用いられていたことが確認できる。

次に、1980年代後半(1985～1989年)の状況を分析してみよう。この時代の上位を占める「仕事」(2位、計8件、件数頻度25.81%、9回出現)、「社会」(2位、計8件、件数頻度25.81%、9回出現)、「人」(4位、計6件、件数頻度19.35%、6回出現)、「女性」(5位、計3件、件数頻度9.68%、3回出現)、「場」(5位、計3件、件数頻度9.68%、3回出現)は、どれも全体ランキング10位以内に位置する常連組である。

ここで、「仕事」と「社会」との2つは、ともに全体の件数が29件で必ずしも多いとは言えないが、その時代の4分の1以上(ともに25.81%)の文章に登場するキーワードとなっていることを踏まえると、全時代的であるとともに、日本語「自己実現」の意味内容の源流に位置する重要キーワードであるとみなせる。とりわけ、この時期に「自己実現」という記事の約4分の1に「仕事」というキーワードが含まれていることの意味は、「自己実現」という言葉の普及過程の萌芽期には「仕事」が随伴していて、もっと言えば「仕事」が中心軸に位置していたとみなしうるということである。

これらに対して、「生き方」・「道」・「日本人」・「余暇」は同点5位(計3件、件数頻度9.68%)で出現数もどれも3件で同じである。しかも、この4つの単語は、全期間の総合ランキングがどれもあまり高くなく、「生き方」が42位(計19件、件数頻度2.01%、19回出現)、「道」が63位(計15件、件数頻度1.59%、15回出現)、「日本人」が105位(計10件、件数頻度1.06%、11回出現)、「余暇」が205位(計6件、件数頻度0.64%、6回出現)という具合である。取り急ぎ、そもそものサンプル数が少ないという留保をしなければならぬとはいえ、これらの単語を1980年代後半ならではのキーワードの候補には挙げられるので、一応の確認をしておきたい。

まず、「生き方」については、価値判断に関わる文脈で用いられがちことが確認できる。たとえば、“女性の社会進出が進み、人々の生き方が個性化・多様化し、カルチャースクールに通うなど自己実現志向が強くなっている”(1988年12月13日付、東京朝刊)というように、「生き方の個性化・多様化」について「自己実現」という呼び方をしているものもあれば、“自分自身の生き方、充実感を最優先させる「自己実現型」の人間”(1987年3月19日付、東京夕刊)といったタイプ分けをするものもあり、“感性や気配の見直しといったことには賛同する人でも、消費を生き方というレベルでの自己実現の方法とする点には、「さて」と首をかしげるのではないだろうか”(1988年3月28日付、東京夕刊)という

ように、「生き方としての自己実現」の成り行きを無批判に賞賛することなく相対化して批評しようとする言説もある。

次に、「道」については、「自己実現」とつながられていくゆえの独特の用い方が確認できる。実際、「自己実現」の道を閉ざされた多くの人々”（1987年4月13日付、東京夕刊），“科学と外交など場面は違っても、アメリカ人の中には独創性の発揮こそ自己実現の道であるといった根強い“信仰”があるようだ”（1988年4月27日付、東京夕刊），“単に仕事を決めるんじゃないく、教育の一環としての就職活動、指導なわけで、自分の長所を見つけ、体をとおして社会に貢献し、自己実現の道を探るということを理解してもらわないといけない”（1988年8月29日付、東京朝刊）となっているように、「自己実現の道」という表記が多用され、それが物理的な意味での「道」ではなく、「生きる方向性」というような意味合いで言われていることが確認できる。

さらに、「日本人」についても、「生き方」や「生きる方向性」についての文章内容ばかりが並ぶ。“ひと昔前まで、日本人に根強くあった「国のため、社会のため」といった意識が薄れはじめ、自分自身の生き方、充実感を最優先させる「自己実現型」の人間が生まれ始めている兆しではないかというのだ”（1987年3月19日付、東京夕刊）や、“労働を苦役ととらえるドイツ人と、仕事を通じて自己実現していかうという日本人と思想も伝統も違うから、どちらがいいとは即断できないが、わたしら少しはゆっくりしたほうがいいねえ”（1989年8月5日付、東京夕刊）とか、“週休2日制の拡大、労働時間短縮で日本人のライフスタイルが変化し、とくに若者を中心にして自己実現を目指す人が増えている”（1989年8月21日付、東京朝刊）というような具合である。

最後に、「余暇」については、「自己実現」にとっての意味づけや位置づけが拡散化していることが確認できる。一方では、“「自己実現」「減私奉公」「協調と和」「男女対等」「温情期待」「余暇充実」の六項目について勤労者の意識構造をさぐり、男女、学歴、年齢別に分析した”（1986年11月25日付、東京朝刊），“最近の消費を楽しみ、余暇を充実させる傾向は、「自己実現」の道を閉ざされた多くの人々の、代償的な「自己表現」の行為だと見る”（1987年4月13日付、東京夕刊）というように、「余暇」は「自己実現」とは別物の対比されるものとして扱われている。だが他方で、“私たちは余暇というと、まず観光ということを考えるが、リゾートはそこに長く滞在し、生活を楽しみながら自己実現をしていくことだ”（1989年7月26日付、東京夕刊）というように、「余暇そのもの」の中に「自己実現」を見出す考え方が出てきている。

こうした「生き方」・「道」・「日本人」・「余暇」といった時代のキーワードをつなげて考えてみると、1980年代後半には、日本人の生き方が「仕事によって得られる自己実現」という道をめざすことがすでに暗黙の前提となっていることが踏まえられた上で、「余暇の充実を通じた自己実現」というライフスタイルが広がりつつあったという言い方ができよう。いわば、1980年代後半は、「生き方」をめぐる変わり目があり、それが「自己実現」の意味内容の転換として生じたのである。

Ⅲ 1990年代の「自己実現」の意味内容

1990年代は、日本語「自己実現」が一気に普及する時期である。1980年代前半に一般新聞でもあまり取り上げられていなかった日本語が、1980年代後半に時折登場してはいたが、1990年代をつうじて頻繁に用いられるようになり普及した。当然、そこには時代背景が関係しているが、どのようなキーワードを随伴的単語としていたかにこそ注目しておきたい。

A 1990年代前半(1990～1994年)における特徴的単語

全期間の名詞ランクの11位までに入っていないのにもかかわらず、1990年代前半(1990～1994年)の総合ランク11位までに入っている名詞は、5位の「活動」(計11件、件数頻度8.94%、11回出現)、6位の「人間」(計10件、件数頻度8.13%、11回出現)、9位の「男性」(計8件、件数頻度6.50%、9回出現)の3つである。これらの単語を含んだ文章を具体的にチェックして、その特徴を確認してみる。

まず、「活動」については、「自己実現へと到るための回路」として「仕事」以外の選択肢が提示されたことがあったという意味で極めて重要である。このことは、“「子育て中の母親グループで活動。仕事だけが自己実現ではない」など”(1994年1月27日付、東京朝刊)という言い方に典型的である。実際、「武井について、埼玉銀行人事部長の依田英男は「これからは仕事以外でも自己実現を図る時代。うちは地域に密着した銀行なので、彼の活動はイメージアップにもつながる」と評価を惜しまない”(1990年9月13日付、東京朝刊)とか、“社会的な活動をすれば、定年もなく自己実現ができる”(1992年9月18日付、東京朝刊)というような言い方は、「会社で仕事をするにより得られる自己実現」とは異なる筋道が存在することを暗示している。さらに、“自由時間を活用した趣味やスポーツ、ボランティア活動などの「自己実現」の在り方にまで、行政は立ち入るべきではない”(1993年11月13日付、東京朝刊)という表記は、「仕事以外による自己実現」の複数の筋道を具体例として明示している。

次に、「人間」がキーワードとなる場面は、単なる「人(人々)」とは異なる価値的な意味合いが強くなっていて、「生き方」をめぐる思想・哲学的意味合いが垣間見える。まず、“「情報」はあくまでも人間の自己実現の道具にすぎない”(1992年1月1日付、大阪朝刊)や、“本書では、「受験」を「苦難」と見るのはただの受験生」とし、「人間として一番成長する時期に重なる絶好の自己実現のチャンスだ」と考え、頭をきりかえて充実した毎日を送ることを勧めている”(1992年12月25日付、東京夕刊)といった表記は、「人間の生きる目的」として「自己実現」が重要視されているという既成事実を顕著に示している。また、“創業百周年で「人間尊重企業」を宣言し、社員の自己実現を提唱していた”(1992年1月9日付、東京朝刊)、“育児にせよ、社会奉仕にせよ、その人なりの自己実現を会社が手助けし、一人の人間として円熟味なり幅なりを「会社の財産」として蓄えていこうという考えだ”(1994年1月24日付、東京朝刊)という表現からは、企業や会社といった社会集団が「尊重される対象としての人間」を語る際の必須用語として「自己実現」が頻用されることがうかがえる。そして、こうした発想の背景には、“J・K・ガルブレイスは人間が現金をより多く獲得して欲求を充足しようとする社会は、まだ未成熟な社会であって、人間としての生きがいや「自己実現」を重視し、現金収入はそのための手段に過ぎないと多くの人々が考える社会こそ本来の豊かな社会だ、と指摘している”(1991年5月19日付、東京朝刊)というような思想が存在していると言える。ただし、「自己実現」が必ずしも「人間的価値として尊いもの」とはみなせないことを際立たせるために「人間」という言葉が用いられている場合もあり、“「人間の務め」と達観する人と「自分の能力を発揮するため」と自己実現を目指す人の割合は、年代によって逆の傾向を示している”(1991年2月11日付、東京朝刊)という表記は、その一例である。

最後に、「男性(男、彼)」という言葉については、「女性」という言葉と対になって使われていることが多いことが何より強調されるべきである。たとえば、“女性が、男性とともに社会でも家庭でも自己実現を図ることのできる社会”(1992年1月24日付、東京朝刊)や、“女性の社会進出や自己実現の機会は増えたが、「良き妻良き母」だけで終わる人生は嫌。でも、今のように効率優先型の男性社会で働き続けることもしんどい。その狭間で、自分らしさは何か必死に探し、混乱している状態の女性が多い」といった感想が次々に出された”(1994年12月26日付、東京朝刊)といった例に見られるよ

うに、「女性」が主となった書き方を補足する意味合いで「男性」という表現が出てきていると考えてよい。たしかに、“男と女のかかわり方の選択の問題であろうが、お互いが自由と自立を尊重し、適当な距離感を保ちながら、もっと快適で自然な自己実現の方法を考えてはどうだろうか”（1992年4月12日付、東京朝刊）というように、男性と女性との関係そのものを主題として「自己実現」が語られるときもある。だが、“自由で対等なはずの女と男の恋愛の結果、結婚すると、女性は生きる場を家庭に限定され、社会的に自己を実現する道を放棄することになった”（1993年5月16日付、大阪朝刊）というように、つまるところ、「女性」が主題とされた文脈において「自己実現」が用いられ、「男性」は付け足し的な位置づけにあることが多いと再確認できるのである。

これらについて、いささか勇み足となる分析を進めると、「女性」の「男性社会」に対する不満について、そうした感情をストレートに出すのではなく、裏返して肯定的方向に昇華させたキーワードとして「自己実現」が社会的に登場して広がったとも考えられよう。

B 1990年代後半(1995～1999年)における特徴的単語

全時代の名詞ランクの11位までに入っていないのにもかかわらず、1990年代後半の名詞ランク11位までに入っている名詞は、8位の「自立」（計12件、件数頻度6.38%、12回出現）と、件数では9位で並んでいる5つの単語、すなわち「ケア」（計11件、件数頻度5.85%、11回出現）、「ボランティア」（計11件、件数頻度5.85%、15回出現）、「高齢者」（計11件、件数頻度5.85%、12回出現）、「参加」（計11件、件数頻度5.85%、11回出現）と「尊厳」（計11件、件数頻度5.85%、11回出現）である。

このうち、「ボランティア」以外の単語、すなわち「自立」・「ケア」・「高齢者」・「参加」・「尊厳」の件数が多い理由は、1999年が国際高齢者年に当たり、それに関する報道が新聞紙面で盛んになされたことが顕著に反映している。たとえば、“「高齢者のための国連原則」には、各国共通の目標として、「自立」「参加」「ケア」「自己実現」「尊厳」の五項目が挙げられている”（1999年2月1日付、大阪朝刊）という記事と“高齢者の自立、参加、ケア、自己実現、尊厳——を盛り込んだ「高齢者のための国連原則」を具体化させるため、「すべての世代のための社会をめざして」を統一テーマに掲げている”（1998年9月9日付、東京朝刊）という記事とは、発行時期が相当に異なるにもかかわらず、大本のニュースソースが類似していたと思われる。実際、「高齢者のための国連原則」を扱う中で「自立」・「参加」・「ケア」・「自己実現」・「尊厳」を列挙する流れの中で「自己実現」にふれたとみなせるものは、「自立」で83.3%（全12件のうち10件）、「参加」で90.9%（全11件のうち10件）、「ケア」で90.9%（全11件のうち10件）、「尊厳」で100.0%（全11件のうち11件）を占めている。また、「高齢者」が「高齢者のための国連原則」に関連して用いられている割合は72.7%（全11件のうち8件）である。

しかも、「自立」・「参加」・「ケア」・「尊厳」といった単語が「高齢者のための国連原則」とは異なる文脈で用いられている場合においても、基本的には「高齢者」が話題になっている。実際、「自立」についての例外的な二文についていえば、“長い間「社会保障を補完するもの」と考えられて来た福利厚生が、働く人の自立や自己実現を後押しする、新しい時代に見合った制度へ変わろうとしている”（1999年7月28日付、東京朝刊）という一文からは高齢者化社会のニュアンスがはっきり読み取れるので、“中道政治に基づく二十一世紀の社会システムに転換していく戦略として〈1〉個人が集団に埋没する在来型の集団主義社会から自立と連帯を基本にする社会への転換〈2〉自己実現の前提である生活安全保障の確立〈3〉平和・文化の先導国家作りなど夢と生きがいの創造——を提起している”（1999年6月13日付、東京朝刊）といった、「自立」と「高齢者」とが直に結びつかない例は珍らしい。たしかに、「参加」

について例外的に存在する一文は、“このような選手は、五輪参加、社会的支援を自己実現の一つと位置付けることができず、社会的に未熟だったとも言える”（1996年8月22日付、東京夕刊）となっており、高齢者とは直に関係してこないものである。しかしながら、「ケア」について例外的に存在する一文についても、“こうしたサポートは以前、あまり関心を持たれませんでした、お年寄りが日常生活のなかでセルフケアができるよう、また自己実現ができるよう、さまざまな試みがなされるようになっていきます”（1997年1月14日付、東京朝刊）というように、「お年寄り」すなわち「高齢者」が話題になっている文脈で「ケア」と「自己実現」とが同時使用されていることが確認できる。さらに、「尊厳」については、すべてが「高齢者のための国連原則」絡みの登場であり、例外が皆無である。

では、「高齢者のための国連原則」の文脈とは異なる使われ方の「高齢者」はどうなっているか。例外的な3件を確認すると、“一方で老化に伴う病気や障害があっても、生活のはり、人生の意味、自己実現などを求めて活動する高齢者たちも少なくない”（1997年4月9日付、東京朝刊）、“「少子高齢化社会が進行する中で、高齢者や障害者が独立し、自己実現できるような環境を整えていかなくてはならない」と指摘した上で、「互いに役立って暮らしていくことが、すべての世代が共生するまちづくりにつながる」と訴えた”（1999年7月24日付、大阪朝刊）、“今回の中間案では「すべての市民が自立し、自己実現するための環境づくり」を基本目標に、高齢者介護や要介護状態の重度化を防ぐための推進策などが列挙されたが、提供サービス量などは具体的に示されていない”（1999年9月7日付、東京朝刊）となっている。どの文章にも共通することは、「福祉の客体」としてみなされてきた高齢者像のイメージの転換である。つまり、「自己実現しうる主体」としての「高齢者」がクローズアップしているわけである。

いずれにしても、国際高齢者年というモメントがあったとはいえ、「高齢者」と「自己実現」とを結びつける流れが確実にできてきたのが1990年代後半だと位置づけうるのである。

C 1990年代の自己実現概念の特徴

1990年代をつうじて何より注目せざるをえないキーワードは「ボランティア」である。全期間をとおして25位（計25件、件数頻度2.65%、30回出現）にランクされている「ボランティア」は、1990年代以前には全く登場してこなかったのにもかかわらず、1990年代前半では24位（計4件、件数頻度3.25%、4回出現）にランクされ、1990年代後半においては9位（計11件、件数頻度5.85%、出現数15回）にまで順位が上昇した。しかし、この単語は、2000年代前半では41位（計8件、件数頻度2.50%、9回出現）にまで順位を下げ、2000年代後半においては150位（計2件、件数頻度0.80%、出現数2回）となって、さらに順位も件数頻度も下げてしまうのである。この点で、「ボランティア」は「1990年代の自己実現」をまさに象徴する代表的キーワードだと位置づけてよい。

では、「ボランティア」に関する具体的な文章を確認しよう。「自己実現」との兼ね合いで「ボランティア」という単語が初出するのは、1992年末のことであり、“ボランティアという言葉は、今では障害者や老人など弱者のために社会的奉仕をすることに広く使われていますが、本来は、自己実現のための創造的、自主的な活動をすることであるということ、ある著書から教えられました”（1992年12月23日付、東京朝刊）というような理論的な物言いとして登場する。こうした発想は、1990年代後半には広範囲にわたり、“全国連絡協議会でも話し合われたことだが、ボランティアは、自己発見や自己実現の要素を内在している”（1996年1月15日付、東京朝刊）といった理論認識が示されるのみならず、“「他人のために尽くすというより、自己実現など自分のために始める人たちが増えている」と、

全国ボランティア活動振興センター所長の和田敏明さんはボランティア参加者の意識の変化を指摘する”（1998年8月4日付、東京朝刊）という事実認識も示されているほどである。加えて、“「ボランティアとは、自己犠牲ではなく自己実現なのだ」と目覚め、以後、地域活動に積極的に貢献し、同州ダーラム市の名誉市民にも選ばれている”（1997年9月26日付、東京朝刊）とを感じる人もいるように、他人のために尽くすか自分のためかという二項対立ではなく、他人のために尽くすことの中にこそ自分のためになる手がかりがあるという調和的関係性を読み取れよう。いずれにせよ、“自己実現を求めてボランティアやN G O活動に飛び込む若者も増えている”（1995年5月5日付、東京朝刊）という表現に典型的なように、「ボランティア」が「自己実現へと至るための手段」として扱われることが多いことは注目に値する。

ただし、こうしたボランティア理解に歯止めをかける意見も出されていて、“ボランティアについても、自己実現というより、じぶんのような者でも他人の前でわずかなりとも意味のある存在たりうるのだという感情をもてること、と考えたほうがいい”（1999年6月15日付、東京朝刊）というように、「ボランティアの目的」を「自己実現」に置いてしまう軽率さを自重するよう促す意見もある。

いずれにせよ、「ボランティア」が、「仕事」に代わる「自己実現の手段」としてみなされるようになった。それは、1990年代において一世風靡したと言えるほど全体に影響を及ぼしたわけではないけれども、「自己実現」にとっての随伴的用語として一定の市民権を得た単語である。

IV 2000年代の「自己実現」の意味内容

2000年代は、量的な意味で「自己実現」の普及が加速化する時期である。その出現件数の多さも注目に値するが、その内実に大きな変化が起きている点にこそ、質的データを取り扱うがゆえに見えてくるポイントがある。それでは、どのような特徴があるか詳しく見てみよう。

A 2000年代前半(2000～2004年)における特徴的単語

まず、2000年代前半の名詞ランキングについて、全時代の総合11位までに入っていないのにもかかわらず、この時代の11位以内に入っている名詞は、10位の「個性」（計23件、件数頻度7.19%、25回出現）のみである。この「個性」という単語は、全時代の総合ランキングで17位（計31件、件数頻度3.29%、33回出現）という、比較的に高順位に位置するものである。しかしながら、「個性」の全件数の67.7%（全31件のうち23件）が2000年代前半に集中して出現していることを踏まえると、それは2000年代前半に特徴的な単語だと位置付けられる。

実は、これには明確な理由がある。その社会的事情を踏まえるならば、その当時から見れば結果的に2006年に改正された教育基本法の中身をめぐって、教育関係者を中心にして社会的関心が高まったため、2003年3月20日に出された中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」の内容が新聞で盛んに報じられたことに関係する。教育基本法改正をめぐる中央審議会において、「新たに規定する理念」の中の明確なキーワードとして「自己実現」と「個性」とが対になる形で両者ともが前面に押し出されてきたのである。たとえば、“(1) 前文及び教育の基本理念〈前文〉教育基本法的重要性を踏まえて、その趣旨を明らかにするために引き続き前文を置くことが適当〈新たに規定する理念〉〈1〉個人の自己実現と個性・能力の伸長、創造性の涵養(かんよう)〈2〉感性、自然や環境とのかかわり〈3〉社会の形成に主体的に参画する「公共」の精神、道徳心、

自律心の涵養〈4〉日本の伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心と国際社会の一員としての意識の涵養〈5〉生涯学習の理念〈6〉時代や社会の変化への対応〈7〉職業生活との関連の明確化〈8〉男女共同参画社会への寄与”（2003年2月28日付、東京朝刊）という記事においては、新たな理念的支柱として「個人の自己実現と個性・能力の伸長」が最初に出てくることを事前報道している。なお、2000年代前半において、この答申に関する直接的な記事は、「個性」をめぐるもののうち73.9%（全23件のうち17件）を占める。

もちろん、この答申とは無関係に書かれた記事の中で「個性」が出てくる場面もある。たとえば、“色々な個性を持つ人が自己実現を”（2001年4月4日付、東京朝刊）といった記事タイトルの中で、“教育学者の太田亮・東大名誉教授も「画一的だった公教育が豊かになる兆し。色々な個性を持った若者や大人が自己実現をしてほしい」とエールを送る”（2001年4月4日付、東京朝刊）といった文章のように「多様性」が強調されることがある。また、“児童生徒の立場に立って、一人ひとりが個性を発揮し、存在感や自己実現の喜びを実感できるような指導を実践してください”（2000年4月4日付、大阪朝刊）とか、“自己実現を目指す自立した人間の育成を図るため、基礎・基本となる学力と学ぶ意欲をしつかりと身に着けた上で、一人一人の個性に応じたきめ細やかな教育を行い、その能力を最大限に伸ばしていくという視点が重要”（2002年11月15日付、東京朝刊）というように、個人個人の「個性」が語られるような文脈で「自己実現」が用いられる。このように、2000年代前半には、「自己実現」が個々人の個別的で多様な生のあり方を肯定的に捉えるという方向性を示す言葉として定着しつつあったのである。

B 2000年代後半（2005～2009年）における特徴的単語

次に、2000年代後半の名詞ランキングについては、全期間の名詞ランキング11位までに入っていないのにもかかわらず、この時代の11位以内に入っている名詞は、9位の「育児（子育て）」（計16件、件数頻度6.43%、20回出現）のみである。たしかに、「育児（子育て）」とは、総合ランキングで17位（計32件、件数頻度3.39%、37回出現）にあり、比較的に高順位に位置しているものであるが、この単語のみがランクされたことを考えると、この時代のシンボルとみなしてよからう。さらに言えば、全期間の名詞ランキングで23位（計27件、件数頻度2.86%、28回出現）の「母親」がこの時代の12位（計11件、件数頻度4.42%、12回出現）にランキングしていることもあわせて考えるならば、この時代の自己実現概念の特徴が明確に浮かび上がるのである。

2000年代前半のものであるが、「育児（子育て）」と「母親」とが同時に用いられている文章として、“働く母親が自己実現できて満足しているかというのと、「子育てが中途半端にならないか」と悩んでいる”（2000年3月23日付、東京朝刊）という表記が見られる。また、“結婚や子育てが自己実現の邪魔になると考える若者が増えてきている”（2000年10月23日付、西部夕刊）と表記されたり、“少子化については、子育てが自己実現の妨げになっているとの認識をどう変えるかが課題”（2004年9月9日付、東京朝刊）という提言が出されたりしているほど、「女性」が「母親」になることに対して消極的な様子もうかがえる。さらに、2000年代後半になると、社会評論家の芹沢俊介により、“「個」を重視する時代に育った今の女性は、母親であるということだけでは満足できず、育児以外の場所で自己実現を図りたいという気持ちが強い”のにもかかわらず、“母親の個をも尊重しようというところまでは、周囲の理解が進んでいない”ために、“結局、母親は育児だけに追われることになり、子供が自己実現を邪魔していると考えられるようになる”と分析されてしまうほどなのである（2005年5月7日付、東京夕刊）。

ところで、1990年代前半には、「母親が自分の自己実現の夢を子供に託しているケースは多い」（1993年11月22日付、東京朝刊）と分析されることがあるが、その場合の「母親」が指し示すのは主に「専業主婦」なので、「専業主婦の自己実現」の手段として「子ども」がクローズアップしていた様子がうかがえる。これと対比すれば、「育児」や「子ども」に強いマイナスイメージをかぶせた2000年代的な自己実現概念は、「働く女性」および「働く母親」という文脈において言われがちである。

こうしたことが生じうる事情については、[超・少子化を語る]という連載の第3回目に「母親の負担感増加」と題された記事（2006年1月6日付け、東京朝刊）において、当時の読売新聞東京本社文化部長の菅原教夫が歌人の俵万智にインタビューして得た回答が象徴的である。これをそのまま引用する。

——女性が子供を産まず、結婚もしなくなってきた理由は何か。

「社会で仕事をし、自立して生きる喜びを女性が知ったことは大きい。仕事と子育てを両立できる環境がまだ整わないので、どちらかを選ぶことになりがちなのは。ただはっきり選択した結果というより、産みそびれてるという感じの人も多いのではないかな。昔は、結婚適齢期があり、結婚したら子供を産んで、とモデル通りの人生に疑問を抱く間もなかったけれど、今は女性の選択肢が増えた。それはとてもいいこと。だが、選ぶからには迷うし、時間もかかる。出産だけは残念ながらタイムリミットがあるので、産みそびれている面はあると思う。また、男女にかかわらず、自己実現ということにすごく価値を置く社会になった。それが行き過ぎると、会社や仕事こそが自己実現の場で、子供に費やす時間は『奪われている』という発想になる。でも、実際に両方やってみると、子供を産むことは大変な自己実現。仕事と違って母親は代わりがいない役割、存在だから」

俵万智の示した図式は、つまるところ「会社勤めしたり仕事したりすることによる自己実現」に対して「子どもを産み育てることによる自己実現」の重要性を強調したものになっている。

俵によれば、2000年代後半の女性の認識として、「母親」もしくは「女性」が「育児（子育て）」を「自己実現」にとって背反的な営みだとみなす思いこみは半ば前提になっている。むしろ、「育児（子育て）」と「自己実現」とを調和的な関係で捉える見方も提出されていて、「「子育てとは、本当は親育て。子どもと一緒に親が自己実現を目指す人生の過程なんですよ」（2005年10月3日付、東京朝刊）と言われることもあるが、テキストマイニング分析上はあくまでも少数派である。

そのため、その解決策が述べられる際の大前提は、両者の背反関係の認識である。まず、「育児（子育て）」と「自己実現」との両立を図る意見が何より多数派を占め、「「子育てと自己実現の両方に強い熱意を持つ母親は多く、情報通信機器はそのための重要な手段になっています」（2006年3月21日付、東京朝刊）、「県は「子育てにかかる経済的な負担を軽くし、子育てと自己実現のための活動が両立できる環境を整え、少子化に歯止めをかけたい」としている」（2006年2月21日付、大阪朝刊）、「自己実現と育児を両立できるシステムが望ましい」（2007年4月3日付、東京朝刊）、「育児中の社員が利用できる短時間勤務制度など、仕事と子育ての両立支援策を12月までにまとめる意向を示し、「子育ても仕事しながら、自己実現できる社会をつくりたい」と訴えた」（2007年6月25日付、大阪朝刊）など、列挙に暇がない。他方で、「「子育ては、自己犠牲がなければ、自己実現ばかりやっていたはできない」（2006年9月22日付、東京朝刊）、「子どもは無条件にかわいい。子育てが自分の中で自己実

現よりはるかに優先順位が高いことに喜びを感じた」と話す”（2005年10月5日付、東京夕刊）というように、「自己実現」に対するある程度の諦めの認識を示すものもある。これらは、「自己実現」へと至る回路としての「育児（子育て）」の可能性が放棄された考え方である。いずれにしても、「育児」は多義的意味合いを持たされて理解されている。そのような全体状況の中で、俵は、「自己実現」にとって邪魔な営為とみなされがちな「育児」を「自己実現」にとって価値ある営為とみなすよう提言しているのである。

C 2000年代の自己実現概念の特徴

先に指摘したように、2000年代をとおして特徴的な動きをしている「人生」について、具体的内容を確認してみよう。2000年代前半においては、“自己実現への渴望は、人生のベテランたちの方がむしろ強いと感じている”（2000年4月27日付、東京朝刊）、“健やかな第三の人生を感謝して生きる人々が、新しい自己実現を求めて交流し、心豊かに晩年を過ごすことを支援する”（2004年9月14日付、中部朝刊）、“それまでの人生で蓄積してきた職業能力、経験、趣味、生活文化をホームページなどで発信するという意欲や、職業を離れても身近な地域社会を基点に、社会参加を通して自己実現するという意欲にあふれている”（2000年9月7日付、東京朝刊）というように、人生でも後半期について述べるものが目立っている。これに対して、2000年代後半においては、“[人生案内] 出久根達郎 30代主婦「自己実現したい”（2007年6月15日付、東京朝刊）という記事タイトルに象徴的なように、人生前半から中盤にかけてのトピックとして「自己実現」が課題化されている例が散見している。職業生活という意味では、“何を自分の人生の目標とし、自己実現の場とするかということに入社した時にすぐ迷い始めて、40になるぐらいまでは、転職しようかとか考えたりしていた”（2005年4月6日付、東京夕刊）、“「人生は一回しかない」と会社を設立し、これからも自己実現を追求する”（2008年12月5日付、東京朝刊）などと言われる一方で、家庭生活という意味でも、“子どもと一緒に親が自己実現を目指す人生の過程なんです”（2005年10月3日付、東京朝刊）、“やっぱり家庭だとか、家庭を営み、また子供を育てることには人生の喜びというか、そういうようなものがあるんだという意識の面を、もうちょっと自己実現といった広い範囲で、皆が、若い人たちがとらえることが必要だ”（2007年2月9日付、東京朝刊）というような文例が見受けられる。このように、2000年代をとおして、「自己実現」が代的な広がりを見せつつ「もっぱら仕事によるもの」から「人生テーマ」に拡大・拡散したことの証左が数多くある。

ここで、世代論的な観点から見て、総合順位は134位（計8件、件数頻度0.85%、8回出現）にすぎないのに2000年代後半に短期集中的に現れた単語として、「団塊」に注目しておこう³⁾。この「団塊」は、2004年に“団塊世代までは教養、知識、地位、お金で自己実現ができたかもしれない”（2004年12月1日付、東京朝刊）という表現が1件カウントされた以外には、すべて2000年代後半に登場し、この時代の21位（計7件、件数頻度2.81%、7回出現）に位置している。具体的な文例として、“団塊世代の「セカンドステージ」の過ごし方は、富裕層、活動家層、自己実現層など五つの型に分けられる”（2007年2月4日付、東京朝刊）、“豊富なビジネス経験を持つ団塊世代にとって、退職後の社会参加や自己実現ができる場として関心が高まっている”（2007年5月25日付、東京朝刊）、“団塊世代を中心に、退職後の人生設計や自己実現に関する教育ニーズの高まりが背景にあり、少子化時代の大学経営の新たな柱の一つになりそうだ”（2007年5月26日付、東京朝刊）、“定年を迎えた団塊世代が自己実現を図りながら社会貢献もできる生き方、働き方について考える”（2008年4月17日付、東京夕刊）など

が挙げられるが、どれも「退職後の人生のあり方」に焦点が当たる文脈で「自己実現」が登場している。いわゆる「2007年問題」とは、日本におけるベビーブーマーの最初の世代である1947年生まれの人たちが満60歳になって大量に退職する社会的事象を指しているが、そのこととの兼ね合いで「自己実現」が強調されたという事実が浮かび上がる。

また、2000年代は「学校教育」という文脈で「自己実現」が語られる際に、「自己実現する主体」として「子供（子ども、子、児童）」がクローズアップしたとみなしうる時代である。たしかに、2000年代前半には、“わが子が他人より秀でていることに自己実現の目標を見だし、競い合う”（2000年1月27日付、東京夕刊）、“結婚して子供を産み、子供たちを立派に育てることこそ女性が天から与えられた誇り高い天職であり、それを通して自己実現をすべきだと定められていたように思う”（2000年10月11日付、東京朝刊）、“親が子を、自分の自己実現の道具にしてしまうと、子どもは自分が何者か分からず、他人との区別がつかなくなってしまうのかもしれない”（2004年3月11日付、東京朝刊）など、「自己実現のための手段・経路」として「子供（子ども、子、児童）」が位置づけられているような表記が頻繁に見られる。だが他方で、同じ2000年代前半には、“児童生徒の立場に立って、一人ひとりが個性を発揮し、存在感や自己実現の喜びを実感できるような指導を実践してください”（2000年4月4日付、大阪朝刊）、“今年は「新しい時代に対応した学校運営体制の在り方」「子供が存在感や自己実現の喜びを味わえる学級経営」など七つの分科会を設置”（2000年8月6日付、大阪朝刊）、“学習の意欲を高め、児童の自己実現の成果に対する評価についての研究発表会”（2002年7月10日付、東京朝刊）といった、「子供（子ども、子、児童）」を「自己実現する主体」とみなした表記も見られる。2000年代後半には、“子どもたちが自己実現しながら発言しているクラスでは、先生が他者と出会える場面を瞬時に設定している”（2006年6月7日付、西部朝刊）、“自然の中に放り込むことで、子どもたちに自ら働きかけ、自己実現する力をつけてほしい”（2007年6月13日付、東京朝刊）、“一見、遠回りなものであっても、犠牲の心や感謝の心を子どもたちに体得させ、自己実現をさせることがもっとも大切なことであり、甲子園への近道でもあると思う”（2007年11月11日付、東京朝刊）、“子どもたちの夢を実現し、自己実現を図る基礎をつくる点から考えると、徳育、知育、体育、いずれも十分なものを与えていると、自信を持って言えない”（2009年6月13日付、西部朝刊）、“改定に伴う教師の負担増についても、『労力』は増えるかもしれないが、子供一人ひとりの自己実現を図るにはやむを得ない」と認める”（2008年2月16日付、東京朝刊）というように、教育の役割が「子どもが自己実現すること」を援助・支援することだとみなされていることが確認できる。このように、「教育における子ども自身による自己実現」の考え方は、「育児（子育て）」という文脈で「子ども」の存在が客体的位置づけに閉じ込められ、それどころか「自己実現にとっての邪魔者」のように扱われていたり、自己実現の道具程度にとどめられていたりするのは対照的である。

ところで、世代論的な観点からすれば、全体順位が16位（計33件、件数頻度3.50%、35回出現）の「若者」という言葉に、量的な意味でも質的な意味でも注目する必要がある。この「若者」は、1990年代後半が15位（計8件、件数頻度4.26%、9回出現）、2000年代前半に16位（計13件、件数頻度4.06%、15回出現）、2000年代後半に13位（計10件、件数頻度4.02%、10回出現）であるという具合に、ベスト10には届かないものの、1990年代後半以降は常に上位に位置する単語であり、全33件のうち31件（1990年代後半が8件、2000年代前半が13件、2000年代後半が10件）がこの時期にまとめて出てくる。

ここで強調すべきことだが、「子ども」と「若者」との根本的な違いとして、「子ども」よりも「若者」のほうが常に「自己実現しうる主体」として論じられる傾向を持つ。ただし、その論じられ方には、

時代ごとの質的な変化を読み取れる。

この「若者」という単語の状況について、2000年代に入る以前の時期も確認しておこう。1990年代後半には、「顔のない日本」とか「集団主義の国」などといった評のある中で、ひたすら「自分らしさ・自分なりの個性」など自己実現を追い求める若者の姿は頼もしい（1995年7月13日付、東京朝刊）、「不登校経験を持つ若者たちが、学歴にとらわれずに自己実現を図る場としてログハウスの運営などを行う株式会社を設立する」（1996年3月30日付、東京夕刊）、「若者たちは自己実現によって、社会への責任を果たそうとしているのです」（1996年5月15日付、東京朝刊）というように「若者自身が自己実現しようとする」とに対する肯定的な見解が示される。その一方で、「若者が考える自己実現のあり方」に対する皮肉めいた表現もちらほら見られる。たとえば「エリートコースを順調に歩み、社会的訓練を受ける機会の少ない一部の若者は、与えられたテーマには無批判に順応する一方で、現状に不満を募らせ、手取り早い自己実現の道を求める傾向がある」（1995年5月17日付、東京朝刊）、「癒（いや）しや自己実現を求めてやって来る若者が増えていることに懸念も感じている」（1999年1月24日付、東京朝刊）というような意見が散見される。いずれにしても、1990年代の時点ですでに「若者」を主題とする際の重要テーマとして「自己実現」が話題になり出していることが確認できる。

2000年代前半においては、「結婚や子育てが自己実現の邪魔になると考える若者が増えてきているようにも見える」（2000年10月23日付、西部夕刊）というような言い方で、他の何事よりも「自己実現」の優先順位が高いという考え方が出現し始めた。だが、その一方で、「◎玄田有史「自己実現疲れ、個性疲れの若者を支援せよ」＝論座」（2004年7月28日付、東京夕刊）という論考タイトルに象徴されるように、「自己実現」を希求することそれ自体に「若者」が抱え込んでしまった問題性を読み取っているものもある。いずれにせよ、「自己実現」が若者分析を行う際の重要キーワードにもなっており、「フリーターと無業者」と題された記事（2001年2月26日付、東京朝刊）の中で、「日々の糧を稼ぎながら、将来の目標に向かって努力している」とする好意的な見方は根強い」と書かれた後に、「労働白書は、自己実現型の若者はフリーター全体の約四分の一としている」という分類が示されているほどである。

2000年代後半には、「若者たちも、自己実現ができて、自分を認めてくれるグループがあれば、ある程度まではお金がなくてもかまわないと思っている」（2007年2月21日付、東京朝刊）とか、「一定の財政基盤さえあれば、NPOは、やりがいや自己実現を求める若者にとって魅力的な職場になりうる」（2009年12月1日付、東京夕刊）という表記に見られるように、経済的価値よりも「自己実現」を優先する「若者」が増えてきていることがうかがえる。また、「成熟社会を生きる今の若者が夢という言葉からイメージするのは、「他人とは違う特別な存在」になって「自己実現」を果たすことなのだ」（2005年3月26日付、東京夕刊）と認識されていたり、「若者の間では「会社への帰属意識」が薄れ、「自己実現」を第一に考える傾向が強まっている」（2007年1月1日付、東京朝刊）と分析されていたりするほど、「若者」にとって「自己実現」が最優先事項になっていて、いわば「自己実現至上主義」と名づけてもよいような状況にある。だがそれゆえにかえって、「自己実現」が「若者」自身にとって「苦悩の根本原因」となる逆説的事態が論じられている場面も増えている。実際、「働くことは自己実現と密接不可分」「自分の好きなことをするべき」などの社会からのメッセージが、若者を強迫している」（2006年4月3日付、東京朝刊）という分析もなされている。こうした事態について、「仕事＝自己実現」の洗脳 生きる意味求める現代人」というタイトルの論壇記事（2007年2月21日付、東京朝刊）では、「自己実現のためには低賃金も厭（いと）わない」という若者は確かにいるが、今の社会には、彼らを食い物にし、収奪する仕組みがある、と指摘するのは教育社会学者の本田由紀氏だ（「くやりがい」の搾取）

＝『世界』）」と述べ、“本田氏は、「自己実現系ワーカホリック」、すなわち「仕事＝自己実現」と思い定めるあまり、働きすぎてしまう人たちが今日増えつつあるとの認識を示す”という点が強調されているのである。

このように、「若者」を主題とすると、「自己実現」は極めて両義的に語られるものと化したことが確認できる。1990年代後半においては「自己実現」はまだまだ無邪気に追い求めてよいようなプラス価値を伴った単語だったのに、2000年代になってからは、それを追い求める当事者を観察する評論家からは、痛々しいまでにマイナスのものに見えているのである。

総じて言えば、2000年代に至るまでの過程について、以下のようにまとめられる。1980年代に「仕事」をしている「現役世代」を主体として想定されていた「自己実現」は、1990年代後半には「高齢者」をその主体の範疇に組み入れた。このことは同時に、もっぱら「仕事」という文脈で語られがちだった「自己実現」が「人生テーマ」へと拡張したことを示している。特に、「団塊の世代」を話題にするとときには、これまでは画一的だった仕事人生から、多様な方向へと展開することがはめかされる形で「各々の自己実現」が多様かつ個別的なものとして強調されるわけである。

また、2000年代は、主として「子ども」が「自己実現の主体」たる可能性を「教育」のトピックとして「自己実現」が一定の位置を確実に占めるようになった時代だと言えよう。他にも、「若者」にとっては、「自己実現」とは良くも悪くも切実なテーマとして定着した。こうして、全世代的な人生課題として、この単語は世代的拡散を見せた。つまり、あたかも「自己実現」は、全世代における、そのときそのときの人生段階において求められる目標と化したのである。「自己実現」は、全世代における「人生的理想」とみなされるようになった。

なお、自己実現が誰にとっても人生の至上目的であるという意味で一律に均質化した考え方がある一方で、その方法については多様化しているという状況も指摘できる。仕事でも余暇活動でもボランティアでも、また別の活動でも、この傾向は顕著である。この点については、機会を改めて詳述したい。

まとめにかえて

当の本人は自覚が薄いだろうが、多くの人が「自己実現」という言葉を一義的なものとして捉えたがるものである⁴⁾。というのは、人は自らの見聞きした範囲だけで、この言葉のイメージを半ば無意識的に限定してしまいがちだからである。だが、実際には、その具体的内容について誠実に把握しようとするならば、この言葉を歴史的変化を伴った多義的な複数形で捉えるべき必然性がある。そういうわけで、こうした社会的変化をなるべく「客観的」に捉える方法を、筆者は模索していた。

一昨年度は、こうした歴史的変化についての仮説の創造を行った段階だと言える。昨年度は、その仮説を検証するとともに、新たな仮説を発見をする段階だったとみなせる。あくまでも結果的にはあるが、本稿は、これらの仮説を総合して深める段階に到達していると思われる。

本稿では、量的変化に注目することにより質的分析を深めるという手順を取った。この際、歴史学的方法として、「史料をして語らしむ」という方法論を意識した。筆者としては、質的データを解釈することを最小限にとどめ、「質的データをして自ずと語らせる」という研究方法の実行可能性を提示できたと考える。今後、「自己実現」といった個別の研究内容について深めるとともに、様々なテーマに対して柔軟に対応できるような汎用性のある研究方法も開発していきたい。

ー注・引用文献ー

- 1) 佐々木英和「現代日本語『自己実現』の使われ方に関する基本的考察ーテキストマイニングの手法を用いた質的データの分析ー」(宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第62号第1部、2012年3月所収、225～238頁)。特に、研究方法に関して、本稿の前提となっている内容については、「I 日本語『自己実現』に関する質的データの収集・分析手順」(同上、225～229頁)を参照のこと。
- 2) 【図表1-2】は、以下のグラフと類似しているが、データの取り方が異なるため、数字は基本的に一致しない。佐々木英和「自己実現概念の歴史的変容を実証するための予備的考察ーデータベース分析を目安として生かした発見的研究ー」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第61号第1部、2011年3月所収、145～158頁、【図表1-2】。
- 3) テキストマイニングソフトの野村総合研究所「TRUE TELLER-Ver5.5」において、他のグループにはほとんど出現しないが、特定の時代に集中して出現するものをグループごとに指摘してくれる「単語キーワード」の機能により、「団塊」に注目すべきことに気づいた。株式会社野村総合研究所編『TRUE TELLER テキストマイニング Ver5.0 ベースシステム リファレンスガイド』、110～112頁。
- 4) 社会意識の変遷とは別次元において原理的に「自己実現」を定義したものについては、取り急ぎ以下を参照のこと。佐々木英和「自己実現」、日本人間性心理学会編『人間性心理学ハンドブック』、創元社、2012年所収、322頁。

(平成24年10月1日提出)